談話室

「市場社会」を考える

この20年，「市場万能論」が世情をにぎわせてきた。「市場の力に任せておけば，万事うまくいく。政府が下手な手を下すべきではない。民間活力に任せておけばよいのだ。市場は資源の最適配分をもたらす。垣根・規制を撤廃した経済は成長を実現する」等々。こうした考えが世情を支配するようになったのは，いくつかの要因の野合による。サッチャリズム，ハイエク等による新自由主義，（「戦後の合意」を規定してきたケインズ主義・ケインズ経済学にたいする徹底した批判の上に立つ）「新しい古典派」等の台頭，ソヴィエト型社会主義の崩壊，である。だが，こうした「市場万能論」のよって立つ根拠は，思いのほか，理論的に脆弱であるし，またこれまでの歴史的現実（人はすぐに歴史を忘れる）によっても支持されるところではない。

市場社会とはあらゆる物が商品として市場で取引されるようになっている社会のことである。何よりもそれは，労働（および土地）までもが商品化した社会として特徴づけられる。人間社会のこのような市場化は，長い年月をかけて進展してきた。この現象は，分業の進展と，それによって必然的になってきた貨幣を媒介とする取引の浸透を機軸として，次第に人間社会の周縁部から中枢部へと浸透してきた。とはいえ，真の意味での市場社会が出現するに至ったのは19世紀前半のイギリスにおいてである。その最大の特徴は，労働者階級と産業資本家階級の出現（いまでは風化してしまった概念である）にあるといってよい。産業革命の発生によって，人々はいわば「挽き臼」に投げ込まれ，工場生産システムのもとで働く労働者と彼らを雇用する資本家が「階級」として成立するに至ったからである。こうして市場メカニズムという経済的論理が社会の他の論理を圧倒するような社会が人類史上初めて誕生した。

以降，今日に至るまで，世界はイギリスの後を追いかけて市場社会の形成に邁進してきたといっても過言ではない。当初はドイツ，アメリカが，そしてその後を追って日本（明治の「富国強兵」政策），さらに近時では韓国，台湾，そし

て現在では東南アジア諸国，中国がその後を追いかけて，産業化，市場社会化を押し進めてきている。興味深いのは，成功した市場経済は，「市場万能論」によって生まれてはいないという事実である。イギリスやアメリカをのぞけば，賢明な官僚と優れた企業者が共同歩調をとることで市場社会化に成功してきているのである。逆に，そうした要素が欠落した社会（例えば現在のロシア）は，外部からの市場開放圧力の前に，ただただ社会と経済の混乱を招くに終わっている。

こうした市場社会を特徴づけるのは，何よりもその動態性（= ダイナミズム）にある。市場社会は成長をその本質とするダイナミックな社会システムである。それは二重の意味で動態的である。一方で，市場社会は，分業の進展と競争を通じて，そしてそれらが誘発する技術革新を通じて，生産の増大・成長をもたらす。他方で，市場社会は，その同じ力が既存のシステム（それは伝統社会であったり，既存の産業であったりする）を浸食・破壊していくという特性を有する（近年の中国社会をみよ）。市場の論理は凄まじい力で自己を貫徹させようとする性向（「解き放たれたプロメテウス」）を有するのである。

即ち，市場社会は成長衝動を内包するシステムであり，その爆発力が既存のシステムを破壊するために不安定性（変動）を内在するのである。このプロメテウスをいかに制御できるかは，市場社会の今後にとって，実は依然として重要な課題なのである（「市場万能論」にはこうした視点が欠落している）。市場社会は，完全な自由放任と完全な社会主義を両端にもつスペクトラムの中間にしか位置しえない。難しさは，中間のいずこが最適であるかの見極めにある。

最後に，「市場万能論」的な視点がこれほどまで多数の経済学者をイデオロギー的に（が悪ければヴィジョン的に）支配するようになったのは，史上初のことであるという点を付しておこう。

（上智大学経済学部教授　平井俊顕・ひらいとしあき**）**